

樺 俊雄／光子

死と悲しみをこえて

雄 渾 社

樺俊雄／光子著

死と悲しみをこえて

1967年5月10日

初版発行

死と悲しみをこえて

樺 俊 雄 / 光子著

発行所 **雄 渾 社**

¥ 350

京都市左京区京都大学前 / 電話 (075) 78-9174~7 / 振替京都1914

印刷 / 株式会社 桜井 広 済 堂 製本 / 狩 野 製 本
用紙 / 北越製紙 (丸大紙業納入) 表紙 / 日本クロス工業株式会社

まえがき

愛しい子を喪った親の悲しみ歎きは、だれにでも同じであろう。よしんばその原因が病気であれ事故であれ、あるいはまた世をはかんで決意したのが原因であれ、残された親の悲しみ歎きはどの親にとっても同じであろう。そしてその悲歎の情は子を喪ったことのある親にでなければ理解してもらえぬものかもしれない。七年まえの一九六〇年の安保闘争のなかでついに帰らぬ旅路についた娘、美智子のことは私たちにとってはいまでも忘れられないし、忘れられぬままに悲歎の情は私たちからいまでも去ることはない。考えると、わが家はあの時いらい永遠の喪に服しているようなものである。

悲しみ歎きをあまり人前にさらすものではない、と旧い時代の私などは教えられて育ったものである。事実、私たちは永遠の喪に服しながらも、人前ではつとめて明るい表情をするようにしてきている。また七年前を思い起して、いまさら悲歎の情を新らたにしようと思うわけでもない。だが、娘を愛おしいと思うにつけて、私たちはなぜ娘が死ななければならなかったかを考えつづけてきた。それは、なんと七年間でもある。七年ものあいだ考えつづけるうちに、

娘が実現につとめて果さずにおわったことを、なんとかして親の手で果たしてやろうと思うようになった。親馬鹿だといわれるかもしれない。無駄骨だといわれるかもしれない。そういう気持ちもしないわけでもないが、私たちは娘の意志を受けついで立ち上がる決心をした。文字通り老骨に鞭うって、私たちは勉強もし、実行もした。娘が願っていた平和と民主主義の実現に、一歩でも近づこうとして。

これはその七年間のドキュメントである。もちろん平和と民主主義を実現するのは、それを阻止しようとする大きな力が前に立ちはだかっている以上、そんなに容易なものではない。また、もちろん、私たちの力だけでは、もの数でもない。そういうことは分かっているだけに、私たちはこのドキュメントを発表することによって、ひとりでも多くの人が平和と民主主義の実現のために立ち上って、その実現を促進していただきたいと思う。それにつけても、平和と民主主義を実現するのに最大の障碍となっている日米安保条約、日本を軍国主義と侵略主義の道を歩ませる軌道となっている日米安保条約、娘がその破棄のために戦って倒れた日米安保条約——これの破棄こそ当面の目標であると思う。

それにしても、平和と民主主義を、と叫ぶだけで自己満足している人がいかに多いことか。平和と民主主義を願うならば、その実現に先立って、その実現された状態に適応した人間、ま

たその実現の行為をなしうる人間に自分を変革しなければならぬだろうと思う。春は一日にして来らず、革命は一日にしてならず、と古人はいつている。凍りつく寒さのつづく冬の日こそ春の準備にいそしむべきである。反体制運動が挫折し崩壊にひんしている暗い今日にこそ、私たちは将来にそなえて準備をととのえなければならぬ。いま何より必要なことは、平和と民主主義を願うすべての人ひとりひとりが前衛であることを心がけることである。このように考えながら、私たちは原稿を書いた。日本に春の日をもたらすこの運動に参加する人はみな不退転の堅い意志をもたなければならぬだろう。しかし意志を堅持しても、途中で倒れるかもしれない。娘もそのひとつの例である。けれども、その人はいまはすでに亡き秋田雨雀氏が、私たちを慰めて書いてくださった句、

永遠の処女は

平和のために

たたかいて

今ぞ帰りぬ

盾にのせられ

永遠の処女 樺美智子を讃して

まえがき

まえがき

という句のことばにあるように、同志たちによって榮譽が与えられるだろう。そういう氣持が私たちの氣持である。

最後に出版にあたって熱意をこめて努力された雄渾社社長、垣本剛一氏にお礼を述べるとともに、美智子の思い出の部分の再録を心よく承諾された文芸春秋新社にもお礼を申し述べたい。この部分は旧稿に一部加筆訂正したにとどめたが、一つには娘の死後一カ月に執筆した記憶のなまなましい折のものだけに、ドキュメントとして捨てがたいものがあるためである。他の部分はすべて最近書きあげたもので、この部分は私たち七年間の生活のドキュメントである。

一九六七年四月十日

樺 俊 雄

娘が喪くなつてもう七年、その七年目の命日を、近く迎えるころとなりて、この「死と悲しみをこえて」を世に問うということに私は深い感動を覚える。七年間の時の歩みのなかに、娘の姿は決して埋もれず、時に新鮮に、またある時は強烈に反映されつつけてきたということはないのだろうか？

私にとつても娘の思い出は、その死の悲しみとともに私の肌に、まだはっきりと残っているとしかいいない。手を取りあつて暮した二十二年間の思い出は、まだ私の掌のなかに温もりとして残っている。これは私のからだのなかだけではなく、娘の残していった本棚の本にも、衣類にも残っているのだ。

娘が最後までつかつていた彼女のデスクは、現在は私の部屋の真中に据えられて、私の最愛のものとなり、彼女の本「死と悲しみをこえて」の原稿もその上で書かれたのだ。

あの六月の雨の日に、突然主を喪つた机は、きつとまだ彼女のやわらかな、ひじの重みを覚えていることだろうし、もくもくと、ひたすらに読書した、あの娘の真剣なまなざしをも、机の上のつややかな板は、まだ宿しているとさえ私には思えるのだ。

六月十五日の命日がきたら私はまた沢山の花をかざろう。ある詩人が七年前の娘の死をうたったのを覚えてゐるから。

まえがき

初夏の花ばなにかこまれ
最後に笑うといいし人ここに眠る

一九六七年四月十日

樺

光子

〈死と悲しみをこえて〉

も
く
じ

もくじ

〈その一〉

今も私に語る美智子

一、六月の雨

..... 3

二、「私の受苦日」――まちがいの日にち――

..... 7

三、心に残る影

..... 21

四、五月十九日

..... 26

五、貴重な遺言

..... 35

六、「お母さん！私は犠牲ではない」

..... 40

七、人間らしく生きる

..... 46

〈その二〉

美智子の思い出

一、幼少時代

..... 53

〈その三〉
悲しみを力にかえて

二、 芦屋にいた頃	82
三、 東京に来てから	114
四、 安保闘争のなかで	147
五、 死後	168

一、 衝撃	197
二、 政治	214
三、 繁栄と退廃	224
四、 政治的無関心	239
五、 死と生	249
六、 むすび	257

その一

今も私に語る美智子

樺
光
子



一 六月の雨

今年ももうすぐ「六月」が来る。

十五日、わたしたちはまた集るだろう。国会南門の前に、そして墓の前に、どこからともなく、あまり正確な時間でもなく、わたしたちはいつも集る。

そして墓の前ではきまって雨が降るのだ。わたしたちはローソクの火をかばいながら三々五々、ながい列をつくって、雨のなかを墓へと進む。灯に照らされた墓にむかって、大きな声で唄うのだ。「忘れまい、六・一五」のうたを。

六〇年六月十五日国会南門のなかで、私の娘は二才の生涯を閉じた。

何のためだったろう。日米安全保障条約を改定することに反対して、政府に抗議した全学連の学生の群にたいして、おそいかった野獣のような機動隊の暴力のもとにたおれたのだった。

日米安全保障条約は吉田茂首相の時サンフランシスコでの日米講和条約のなかで結ばれたものである。この条約を岸首相が一段と強化するために、日本から改めて申しこんだ形で結ぼうというのが、安保条約改定なのだった。まったく岸はつまらないことをたくらんだものだ。

この日米軍事同盟は、はたして日本の安全が米国の軍事力によって守ってもらえるものだと決して考えられないもの思えた。

アメリカという資本主義国が帝国主義化していく気配があったからだった。

そしてこれに同調する岸首相は戦前の外務大臣であり、開戦に調印した人であり、戦後の裁判では戦争犯罪人として裁かれた人物なのだ。

娘が亡くなって四日を経て、この安保条約は自然成立の形で参議院を通過し、国民の目の届かぬところで調印された。

そしてその後の七年間の歩みのなかに、今日の日本がつくられた。今日のアジアが——ベトナムが生まれた。

日米安保条約なしには今日のベトナムは生まれていないはずだ。

それと今や日本がこの高度に発達した工業力をもっていることによって、アメリカのかけがえのない味方となっているからこそ、アメリカは安心して今の姿勢を保っていられるのだ。

ベトナムに侵入したアメリカ軍の使用するナパーム弾による悲惨さは、広島、長崎の姿に近づきつつあるというではないか！

ベトナムに投入している米軍の地上軍は、現在はおよそ五十万といわれるのだけれど、その五十万を支える人間がそれと同数ぐらいが必要なはずであるが、その大群がどこにおかれているのだろうか。アリューシャン列島からインド洋にかけて、その大軍はおかれている。もちろん日本列島もそのなかに含まれている。

アメリカは日本基地なしには、ベトナム侵略戦争ができないということになるのである。それだから、アメリカ原子力潜水艦が日本の港へ入ることは絶対に必要なこととなるし、沖縄は手離せないし、砂川の飛行場も拡張しなければならないということになる。

日本は戦争にもう巻きこまれ、協力して戦っているという格好になっている。そして次に何が必要とされるだろうか？

ベトナムの人びとに同情して、日本から薬品や金品が届けられる。けれども彼らはいうのだそう。私たちに同情してくれるのだったら、米軍機を日本から飛び立たせないでください……と。……と。どうしたらそのことが可能になるだろう？ 現在の日本の政府は、はっきりと答えていないのか？